FD Newsletter

Office of Faculty Development
International Christian University

3-10-2 Osawa, Mitaka, Tokyo 181-8585 Japan Phone: (0422)33-3639 Email: fd-support@icu.ac.jp

ICU 60th Year

大教室での授業法

編集後記 16
教授用言語学／守屋　靖代 17
繋がりをつくる―大教室で学生を惹きつけるには／スザンヌ・クェイ 18
言語学入門Ⅰ／吉田　智行 21
一般教育の授業内での自由研究課題の実施／岡村　秀樹 23
大人数で必修の「キリスト教概論」がなぜ面白いか／森本　あんり 26
多様なメジャーの学生が履修する専門科目と教授法上の課題
／山口　富子 28
障がい学生支援セミナー報告（2012年12月18日開催）
／リチャード・L・ウィルソン 30

Vol. 17, No. 2
March 2013

大人数で必修の「キリスト教概論」がなぜ面白いか

森本　あんり／哲学・宗教学デパートメント

はじめに

> 授業には必ず出席すること。周囲に迷惑なので、遅刻もするな。わたしは、出席しなくてもよいような授業はしない。ICU に入学した以上、君たちは日本の他大学の学生のように振る舞ってはならない。高い学費を払って（もら）いながら、授業を欠席するような甘えた根性の学生がいるのは日本だけです。君たちが競うべき相手は、そんなところにはいないぞ。この授業は毎回、わたしや一緒に学ぶ学生との真剣勝負です。しっかり覚悟を決めていらっしゃい。

これは、わたしが昨年度の「キリスト教概論」のシラバスに書いた文章です。このクラスは、毎回 160 人という大人数が受講する本学唯一の必修クラスです。年に 5 つか 6 つのクラスが開講されており、うち一つは英語開講です。受講学生が多いので、一般教育の中で例外的に学外から非常勤もお願いしていますが、担当者の人選は困難をきわめます。

この授業が本学で唯一必修であるということは、どんなに強調してもしすぎることはありません。これを通らねば ICU の卒業生となることはできないわけで、担当教員たちはみな、いわば大学の看板を背負っていることの重みを十分に認識しています。

学生たちからすると、「必修だからしかたなく取る」という人も多いはずです。しかし、わたしのクラスには毎学期 10 人を越える聴講生がいます。彼らは、すでに履修が終わった学生で、来たくて来ているのです。何人かは、低学年の時に取ったこのクラスを、成長した自分がどのように受け止め直すことができるかを知りたくて来ています。

大人数のクラスですが、私語はまったくありません。ほとんどの学生は、じっとこちらに視線を向けて、必死に考えている顔をしています。そういう時の張りつめた雰囲気を、教員ならどなたでもご存じでしょう。自分の知らなかった知的な挑戦を受けて、それにどう対応したらよいのか、答えを探り続けている顔です。

このような授業を成立させているいくつかのツールをご紹介します。これらは、20 年にわたる経験の中から編み出されたもので、他の先生方にも有効と思われる限りぜひ自由に取り入れていただき、さらに改善することができればと願っています。

1. 受講学生アンケート

まず、授業の始めにアンケートをとります。教員が学生たちの素顔を知り、学生たち自身にもお互いを知ってもらうためです。すでに 10 年以上続けているので、いわば ICU 生の定点観測にもなっています。「あなたは自分で信じている宗教がありますか」「これまで宗教的な教育を受けたことがありますか」「宗教やキリスト教に対する印象は」などの問いに答えてもらい、その答えはわたしの HP に公開されています。特に面白いのは「その他何でもどうぞ」という欄への答えなので、一度覗いてみてください。

http://subsite.icu.ac.jp/people/morimoto/syllabi.html

ICU 生には「隠れキリシタン」が多いのですが、ここで自分が「キリスト教徒」であると答える学生は毎年ほぼ 10－15％います。日本のキリスト教人口からすると 10 倍以上の密度ですが、残る 9 割近くの学生にとっては、そういう学生が隣に座っている、ということを知るだけでも大きな刺激になります。

アンケートには、学年や専攻予定などの他に、「ニックネーム」を決めて書いてもらいます。HP での公開も、このニックネームで行われているので、個人情報は保護されています。印象深いニックネームが多いので、学生のことは卒業しても本名でなくニックネームで覚えているほどです。

2. 質問票

ニックネームは、授業中の質疑などに使います。多くの教員が「コメントシート」をお使いかと思いますが、わたしは自分で「質問票」を作っています。大人数で質疑の時間がどうしても不足しがちなため、授業中に抱いた質問を書いて授業後に提出してもらいます。毎回 30－50 枚ほど出ますが、わたしはそれに全部レスポンスを書いて次回の授業時に返却します。その際、次の 3 つの選択肢に印を入れてもらいます。「あなたはこの件に関して、1. 授業中にニックネームで指名され説明や受け答えをしてもよい。2. 授業中にニックネーム

で内容の一部ないし全部を紹介されてもよい。3. 授業中には触れないでほしい。」これは、本名を出すことや授業中に立ち上がって質問することに気後れを覚える学生にも積極的に参加してもらうための方法です。

毎回の授業の冒頭には、その中からいくつかを取り上げてコメントし、可能なら学生本人に補足してもらいます。それがさらなるコメントや質問を生み、他の発言者も出てアドホックなディスカッションが始まることもあります。批判や疑義や誤解を含むコメントは、取り上げると特に教育的効果が高く、わたしにとって「おいしい」宝の山となります。学生の質問が次に予定されている講義内容を先取りしている場合、それは授業が波に乗っていて学生と教員が同じ波長で進んでいることの証拠にもなります。この時間は、20 分から 30 分に及ぶことがあります。このような自由は、この授業が本質的に知識の伝達や積み上げを目的としていないから許される贅沢で、他の教科では難しいかもしれません。

3. 出席簿

わたしの授業は、ICU 用語では「インクリ」(Introduction to Christianity) ではなく「あんクリ」と呼ばれていることも知っています。学生や卒業生によく言われることは「抽選に落ちた」ということで、できればわたしももっと多くの学生に語りたいと思っています。ただ、成績は甘くなく (GPA 2.7 前後)、抽選でないところで「落ちる」すなわち E をもらう学生は、毎回ほぼ 1 割います。

成績内容でも落ちますが、出席で落ちる学生もいます。大人数のクラスで出席を取る方法は、わたしの場合「出席簿」です。これは学生の一覧を回し、自分の欄に名前を書いてもらうだけの簡単なものです。その気になれば、学生は友人に代書してもらうこともできるでしょう。しかし、「署名」は本人の人格をかけた誠実な契約行為だ、と説明すると、ICU 生はきちんとそれを受け止めて尊重してくれます。だからこそ 1 割も落ちるのでしょう。

出席表は、学生に出席を促すための道具なので、次回に出席表を回すことを予告することもあればしないこともあります。これを 1 学期に 6 回取り、3 回欠席があれば自動的に E がつきます (Three-Strike Out)。学生にははじめからこのことを伝えてあり、シラバスにも明記してあります。病気、就活、教育実習、どんな理由でも例外を認めません。そういう事情があれば、別の時に欠席しないようにすればよいだけです。それもできなければ、授業の本来的な目的は達せられませんので、再履修してもらいます。

授業は、その場で交わされる問いと答えを共有し、ともに向き合って考えることが重要なので、メイクアップは原理的に不可能です。学問領域にもよるでしょうが、それを課題図書のリーディングなどで代用できるようなら、そもそも授業は不要だということになります。

ただ、冒頭に掲げましたように、どんな方法で強要するより有効なのは、学生に興味をもってもらえるような授業をすることです。毎回の授業が面白ければ、学生は出席など取らなくても喜んで出てきます。単位を必要としない聴講生が多いのも同じ理由です。

4. ディスカッション

ICU の学生はディスカッションを好みますが、授業として行うなら、それはただ好き勝手なことを言い合うのではなく、“informed discussion” でなければなりません。それを保証する一方法をご紹介します。学生には、主題に関する文献を読ませ、それに対する応答を A 4 用紙上半分にプリントアウトして持参させます。残る下半分には、ディスカッションで得た新しい知見を手書きで書き入れ、その場で提出してもらいます。上下両方が揃っているものだけを評価します。学生は、ID 番号末尾の数字で 10 グループにわけ、別にもう一つ大教室を確保して分散してもらいます。

5. 授業内容

実際の授業内容の紹介はこの小論の目的ではありませんが、一言だけ申し上げておくと、これは聖書や教理の知識を教える時間ではありません。学生の中には、いわゆるミッション系の学校に通っていた人もいますが、すぐに高校までの授業とは違うことを悟ります。ICU のキリスト教概論は、自分がそれまで当然のように前提にしてきた常識や視点を問い直す時間です。キリスト教への回心を迫ることは、逆効果なのでいたしません。しかし、学生たちは知的にばかりでなく実存的にもチャレンジを受けて揺さぶられます。特に宗教観や世界観などの価値をめぐる問いは、自己の文化的なアイデンティティにも関わっており、ふだん意識的に検証することが少ないので、これを以前とは違う角度から新しく多面的に見ることができるようになってほしいと思います。

そのために重要なのは、批判的思考力を高めることです。Critical Thinking は、他人の考えではなく自分の考えを批判の俎上に載せることですので、キリスト教徒にとっては自分の信仰を批判的に見つめ直すこと

ですが、それ以外の大部分の学生にとっては自分の無宗教や無信仰を批判的に問い直すことを意味します。

学生の中には、地元の教会の牧師に「ICU のキリスト教、特にあの先生のキリスト教概論には気をつけなさい」と言われてくる人もあります。わたしのキリスト教理解がリベラルすぎて危険だということでしょう。しかしわたしは、彼らがこれから否応なく受ける人生の荒波にも負けない成熟した大人の信仰を養ってほしいと心から願っています。そのためには、キリスト教に対する多くの批判にも正面から向き合わねばなりません。懐疑を通らない信仰は脆弱です。

神道・仏教・イスラームなど他宗教の知識も、キリスト教を理解する上で不可欠です。「一つの言語しか知らない者は言語について何も知らない」のと同じように、「一つの宗教しか知らない者は宗教について何も知らない」からです。

おわりに

わたしの授業をご覧になりたい方は、いつでも歓迎します。予告や連絡も不要ですので、どうぞいきなりおいでください。飛び入りの発言があれば、なおさら嬉しく思います。新任教員の中には、1 学期を通してこの授業を聴講した先生もおられます。

なお、キリスト教概論では使いませんが、中規模のクラスでは Moodle の使用が効果的です。連絡や資料配付だけでなく、グループディスカッション、プレゼンテーション、小テスト、評価など Moodle の具体的な使用法を説明したレポートを書きましたので、ご興味のある方はそちらをご覧ください。ウェブで全文が読めます。実際の画面や学生の授業評価も掲載されています。

森本あんり「ICT 活用による自発的学習者の育成」、私立大学情報教育協会『大学教育と情報』Vol. 20, No.1（2011 年 6 月号）、19-21頁。http://www.juce.jp/LINK/journal/1103/03_02.html

多様なメジャーの学生が履修する専門科目と教授法上の課題

山口　富子／社会学・人類学デパートメント

はじめに

今回のニュースレターは「大型クラスの教授法」がテーマですが、それを「多様なメジャーの学生が履修する比較的大人数の専門科目の教授法」と読み替えて、筆者が担当する専門科目についてご紹介をさせていただきます。一見、テーマの飛躍が過ぎるように思われるかもしれませんが、比較的履修生の数が多いクラスにおいて、どのような一般教育を行い、どの程度の専門教育を行うかといういわゆるバランスの問題は、一般教育科目、基礎科目、専門科目、すべてにおいて共通する課題かと思います。また、専門科目における学生とのやりとりは、一般教育科目、基礎科目といった大型クラスで見られるやりとりと類似した点があるため、こうした問題の設定は、あながち今回のテーマとはかけ離れているわけではないと考えています。そこで、今回は、広い教養を求めるリベラルアーツ教育という文脈において、深い専門性を求める専門科目をどう展開すべきか、という問題について考えてみることにします。

今回のテーマの正当性についてはこれくらいにして、本題に入りたいと思います。今回は、筆者が担当する「SOC309 科学技術社会学」を事例として取り上げたいと思います。この科目は、毎年、日本語で開講する 3 単位のクラスです。現在は、3、4 年生を中心に、20 名から 30 名程度の履修があります。履修生は、社会学メジャーの学生だけではなく、教育・メディア・社会、環境研究、あるいは生物学といった異なる関心を持つ学生、また日本語を母語としない学生の履修など、多様です。通常、3 コマ縦組みの時間割を組み、10 週間で 2 つの事例研究を取り扱い、講義と演習そしてプレゼンテーションというサイクルを 2 度実施するという形態で授業を進めています。

クラスの目標は、⑴ 科学技術社会論の学術的な論文を理解する力を身につける、⑵ 科学的な「事実」の事実性を紐解く力を身につける、⑶ 自己の価値観をリフレクションできる能力の習得をする、としテーマは以下のように設定しています。